正義が忠誠を倒すとき
マレーシアの恋愛映画『ジュバ』が試みる古典文学の再解釈

山本 博之

2020年９月にマレーシアで映画『ジュバ』(Jebat)が公開された。タイトルの「ジュバ」は男性主人公の名前で、マラッカ王国時代の戦士ハン・ジュバを想起させる。ハン・ジュバはマレーシアの国民的英雄ハン・トゥアの盟友であるとともに最大のライバルでもある。ハン・ジュバはスルタンへの反逆者、ハン・トゥアはハン・ジュバを倒した秩序の守り手で、ハン・トゥアの英雄譚が小説、演劇、映画の題材とされて繰り返し語られることで秩序の重要性とそのための指導者への忠誠の大切さが強調されてきた。とりわけ独立以来の与党連合の中核政党である統一マレー人国民組織(United Malays National Organisation、UMNO)は、積極的にハン・トゥアのイメージを纏うことで、スルタンを護持しマレー民族の権利を守る政党としての正統性を訴えてきた[1)]。

その一方で、ハン・ジュバに焦点を当てることで、ハン・トゥアに体現される価値の相対化をはかる作品も作られてきた。とりわけUMNO総裁のナジブ・ラザク首相(在任2009～2018年)に対する批判が高まっていた時期には、ナジブと対立する政治家にハン・ジュバのイメージが重ねられ、2018年５月の総選挙でUMNOが破れてナジブ首相が退陣する前後の時期には、小説や映画でもハン・ジュバに焦点を当てたものが多く見られた。

『ジュバ』が公開されたとき、主人公の名前がジュバであれば当然想起されるテーマがあるにもかかわらず物語内でまったく触れられず、「あれなら主人公がジュバではなくハッサンでも同じだった」という批判があった。後述するように『ジュバ』ではジュバの恋愛ドラマに重点が置かれ、忠誠と正義・公正の問題は後景に退いていた。この批判はジュバという名前がマレーシア社会で特別な意味を持っていることをよく示している。

ハン・ジュバについての物語では語り方にさまざまな工夫がなされ、忠誠と正義・公正に関する思いが託されてきた。ハン・ジュバがスルタンに反逆してハン・トゥアに倒されるという話の構造が変わることはなかったが、『ジュバ』ではジュバがトゥアを倒しており、ハン・トゥアがハン・ジュバを倒すというこれまでの作品と一線を画している。本稿ではそのことの意味を考えてみたい。

2020年コロナ禍でのマレーシア映画界

はじめに、『ジュバ』の公開の背景として2020年のマレーシアの映画業界の様子を概観しておきたい。

新型コロナウイルス感染症の世界的な流行が生活のあらゆる側面に影響を及ぼした2020年、マレーシアの映画業界も甚大な被害を受けた。2020年３月18日付けでマレーシア全土に活動制限令が出され、映画館を含むほとんどすべての分野で活動が禁止された。５月４日に条件付き活動制限令に変更され、業種ごとに定められた感染症対策の標準作業手順書を守ることを条件に一部の分野で活動の再開が認められたが、人が多く集まることを理由に映画館の営業の再開は認められなかった。６月10日に回復活動制限令が施行されたことで、学校や宗教施設が段階的に再開され、国内観光も可能になったが、映画館の営業は引き続き禁止された。

７月１日には標準作業手順書を守ることを条件に映画館の営業が認められ、３月18日以来閉鎖されていた映画館の営業が再開された。しかし一部地域に感染が拡大し、10月９日にスランゴール州クランとサバ州の３地域で条件付き活動制限令が施行され、スポーツおよび社会的・文化的活動が禁止された。条件付き活動制限令は10月14日に首都クアラルンプー

1) ハン・トゥアとハン・ジュバの語られ方とマレーシア政治の関係については［山本2019a］を参照。

ル、行政都市プトラジャヤ、それらを取り囲むスランゴール州、およびサバ州全土に施行され、11月９日には４州を除く全国に対象が拡大された。映画館の営業は禁じられなかったが、感染の拡大を受けてマレーシア映画興行主協会は11月１日から国内の映画館を全館休館とした。

大手映画館チェーンのゴールデン・スクリーン・シネマズ（GSC）は12月16日から感染症の影響が小さい一部地域で上映を再開したが、首都圏をはじめとする国内各州の条件付き活動制限令は2021年1月の時点でも継続されており、映画業界は先行きが見えない状況が続いている[2)]。

活動制限令下では映画や演劇のオンライン公開の試みもなされた。例えば、英語劇を中心に政治批判を積極的に取り入れた演劇を上演して2019年に設立30周年を迎えたインスタント・カフェ劇団は、2020年7月に『パラ』(Parah)[3)]のZoom上演を行い、11月に『ナディラ』(Nadirah)[4)]の日本公演の収録ビデオをオンライン上映した。有料衛星放送のアストロ社は、３月18日の活動制限令を受けて、契約者が全チャンネルを無料で視聴できるサービスを提供した。さらにアストロに未加入でもマレーシア国民なら誰でも番組を無料で視聴できるサービスを提供し、５万人以上がこのサービスに登録した。

2020年９月３日、新作映画の『ジュバ』がアストロで公開された。視聴者は15リンギの視聴料を支払うことで48時間以内なら何度でも作品を視聴できる仕組みで、公開から４日間で視聴料が130万リンギに上ったことが話題になった。

『ジュバ』が描いた新たな国民的物語の特徴①

『ジュバ』は、2013年にマレーシアで放映されたテレビドラマシリーズの『愛していないためでなく』([E-Man 2013]、以下、「テレビドラマ版」)の続編にあたる。『ジュバ』の制作陣は、『ジュバ』はテレビドラマ版の続編ではなく、テレビドラマ版の世界観を受け継いだ別の作品として作ったので、『ジュバ』とテレビドラマ版には設定などに食い違う部分があると説明した。ただし、人物の設定などに多少の違いはあるものの、２つの作品は基本的な設定や俳優たちが同じであり、『ジュバ』はテレビドラマ版の続編のようなものと考えてよい。

『ジュバ』には2017年に出版された小説版［E-Man 2017］もある。著者のイーマン・スーフィー（E-Man Sufi）はハフィザ・ モハマド（Hafizah binti Haji Mohamed）の筆名である。彼女は1982年にパハン州テメローで生まれ、マレーシア・プトラ大学でコンピューター科学を専攻し、現在はパハン州クアンタンの小学校で教えながら執筆している。３作目の長編小説『愛していないためでなく』が2013年のMPH最優秀マレー語フィクション賞を受賞し、『ジュバ』は５作目の長編小説である。映画[5)]と小説はほぼ同じく話が進むが、映画では小説で描かれているエピソードのいくつかを落としている。ジュバの命を狙う裏社会の事情の部分は、トゥアとジュバの過去の関係を含め、ほとんど描かれない。以下では、『ジュバ』については小説で適宜情報を補いつつ基本的に映画をもとにし、特に必要がない限り映画版と小説版を区別していない。

コメディとアクション要素のある恋愛映画

テレビドラマ版と『ジュバ』はジュバとマストゥラ（マス）の恋愛ドラマである。華人の子として生まれた少年が幼い頃に両親を失い、伯父のクワンに育てられた。クワンは香港を拠点とする裏社会の指導者という裏の顔を持っていた。少年は組織内で頭角を現してロン（龍）と呼ばれるまでになるが、対立組織を潰して裏社会から足を洗う。様々な悪事に手を染めていた過去から縁を切り、ジュバを名乗って、養魚場の管理人としてカタギの生活を送る。

養魚場の所有者の孫娘のマスが留学を終えて帰国する。マスは、裕福な家柄に育ち、美貌の持ち主で、誰に対しても優しく接する気立てのよい女性で、ジュ

2）2021年1月12日、国王は全土を対象とする緊急事態宣言を発令した。期限は2021年8月1日まで。

3）アルフィアン・サアット脚本、ジョー・クカサス監督で2011年に上演された。ヤスミン・アフマドの『タレンタイム』(2009年)にインスパイアされた作品［山本 2019b: 378-379］。

4）アルフィアン・サアット脚本、ジョー・クカサス監督で2009年に上演された。ヤスミン・アフマドの『ムアラフ』(2007年)にインスパイアされた作品［山本 2019b: 378］。2016年11月に日本で上演された。

5）感染症流行などのために劇場公開ではなくアストロで放映されたため、正確にはテレビ映画または単発のテレビドラマであるが、本稿では映画と呼ぶ。

バはマスに一目惚れする。外国の大学院で法学を学んで弁護士の資格を持つ才媛のマスは、中学校卒業の学歴しかなく、過去に様々な悪事を働き、強面で、養魚場の管理人であるジュバにとって高嶺の花だと思われたが、他人と違う価値観を持ち、思い込んだら一途のマスは、額に傷があるジュバのクールさに惹かれ、２人は相思相愛になって結婚する。ここまでテレビドラマ版で描かれる。

映画版の『ジュバ』はジュバとマスの新婚旅行から始まる。ジュバはすっかりカタギの生活を送っており、マスのためなら自分の命も惜しくないと思うほどマスに惚れ込んでいる。マスは天真爛漫な性格でジュバに惚れ込んでいるが、それと同じくらい自分のことも大好きで、一途な性格で譲らないところがある。法学を学んで遵法意識が強いマスは裏社会を毛嫌いしており、ジュバは自分の過去が知られてマスとの結婚生活が失われることを最も恐れている。ジュバは過去のことで裏社会の恨みを買って命を狙われ、マスに気づかれないように刺客たちを倒し、相手の本拠地に乗り込んで決着をつけようとする。

強面のジュバが天真爛漫なマスの前でメロメロになって手玉に取られているラブコメと、ジュバがマスに気づかれないように裏社会の刺客を倒していくアクションが入り混じり、家族で安心して観ることができて子どもからお年寄りまで楽しめる映画と評された。

恋愛、過去、戦い、妊娠――『ジュバ』の物語

ジュバとマスが新婚旅行でプラハを訪れる。観光地を巡り、帽子に花がたくさんついたかわいらしい民族衣装を着て２人で記念写真を撮ろうとするマスに、ジュバは人前でそんな格好をするのは恥ずかしいと文句を言うが、マスのお願いには逆らえない。ジュバはマレーシアの裏社会から命を狙われており、レストランで食事中に客を装った刺客に銃で撃たれそうになるが、マスに気づかれないように襲撃を逃れる。養父のクワンがマレーシアで何者かに撃たれて重傷を負ったという知らせを受けたジュバは、新婚旅行を中断して帰国することにする。

マレーシアに戻ったジュバは、裏社会に狙われることを警戒して家に帰らず、裏社会に加わっていた頃の隠れ家にマスを連れていく。新婚旅行が中断された上に帰国しても家に戻れず、知らない家に連れてこられたマスは不満を言うが、ジュバは何も説明せず、マスを隠れ家に１人残してクワンの家に行く。クワンの家ではクワンの娘ダミアに再会する。ダミアはジュバの初恋の相手で、ジュバが結婚した今でもジュバに想いを寄せており、ジュバをマスから取り戻したいと考えている。

隠れ家にあった車を運転してジュバの後をつけてきたマスがクワンの家に着き、ジュバに止められながらもクワンに会い、腹部を撃たれて大怪我しているクワンを見て驚く。裏社会の刺客たちの襲撃を受け、ジュバはマスたちを逃がして１人で刺客たちと戦うが、その様子を見たマスはクワンたちを逃がし、車を運転して現場に乗りこんでジュバを救出する。

マスは車を運転しながら、なぜクワンとジュバが命を狙われているのかジュバが説明しないことに腹を立てる。マスは、運転を替わるというジュバの申し出も、これからどこに向かうべきかというジュバの指示も無視し、いとこで警官のアリに相談するべきと主張する。ジュバは、警察沙汰にすることで過去の裏社会との関わりが知られるのを避けたいことに加え、マスに想いを寄せているアリがマスとジュバの結婚に不満を抱いていることから、アリに相談することに反対する。

ジュバは問題解決のためには裏社会のリーダーに会う必要があるとマスを説得して車を北に向かわせる。空腹を訴えるマスのために売店に立ち寄ってスナック菓子を山ほど買い込み、ジュバのもう１つの隠れ家に立ち寄る。マスがスナック菓子を食べている間に洗面所に入ったジュバは、待ち伏せていたジャスミンに襲われる。ジャスミンは、クワンと敵対するキオンの組織のメンバーであり、キオンの息子キットの有能な部下で、キットの指示でジュバを殺しに来た。ジャスミンはキットの恋人だが、彼女はジュバにも想いを寄せており、自分と一緒に暮らすなら見逃してもいいとジュバに持ちかける。しかしジュバは断り、ジャスミンとジュバの武闘になる。洗面所の中から暴れている物音が聞こえて訝しがるマスをごまかしながらジャスミンを倒し、ジュバはマスを車に乗せて再び北に向かう。

マスは空腹を訴えて中華の屋台街に立ち寄る。追跡してきた裏社会の男２人をジュバが倒している間

にマスは屋台で鴨肉を注文していたが、ジュバは鴨は餌に何を食べているかわからないのでハラルでない可能性があると言って鴨肉を捨てさせる。「お腹がすいた」と騒ぐマスに、ジュバは「まるで妊婦みたいだ」と言い、その言葉をきっかけに２人はマスの妊娠の可能性を意識し始める。

マスは妊娠しているか調べる前にジュバの過去をすべて話してほしいと求め、ジュバは自分の過去をマスに話すことにする。２人は薬局で妊娠検査薬を買って付近のホテルに部屋を取り、ジュバは背中の龍の刺青を見せる。刺青を見てショックを受けたマスはホテルから車で走り去り、走って車を追いかけたジュバが車に飛び乗る。その間に車が崖から落ちそうになるが、かろうじて命が助かった２人は互いのことを大切に思っていることを確認しあう。車は崖から落ちて大破するが、２人は通りかかったトラックに乗せてもらってペラ州のイポーに着く。

空腹を訴えるマスが市内の食堂で山のように盛った料理を食べ、付近のホテルに部屋をとる[6)]。そこにアリたち警官が来てジュバが連行される。マスがアリに密かに連絡していたことを知り、ジュバはマスに裏切られたことをどう受け止めるか悩む。釈放されたジュバは、マスが困ったときに最終的に頼ったのが自分ではなかったことを残念に思い、自分には夫としてマスの人生を導くことはできないと言ってマスの前から立ち去る。

ジュバはキオンの工場でキットに会う。キオンは亡くなっており、跡を継いで裏社会のリーダーになっていたキオンがクワンとジュバの命を狙っていた。クワンとキオンはかつて同じ組織に属していたが、クワンが組織を解散してその資産をすべて独占したためにキオンが失意で亡くなったとキットは考えており、その原因を作ったジュバを恨んでいた。キットは、ロンがジュバを名乗るならば自分はトゥアを名乗ると言い、ジュバを倒してクワンの財産を受け継ぐと宣言する。死闘の末、ジュバは「ジュバは反逆したことがない」と言ってトゥアを倒す。かけつけたマスの通報で警官が到着してトゥアが連行される。

ジュバとマスは和解して一緒にホテルに戻る。マスが妊娠検査をするが、停電で真っ暗になって結果がわからないまま幕が閉じる。

『ジュバ』が描いた新たな国民的物語の特徴②

ジュバの「男らしさ」の発揮と失敗

『ジュバ』の特徴としてジュバが「男らしさ」にとらわれていることが挙げられる。刺客との戦いにおいては肉体的な強さが十分に発揮されるが、マスとの関係においては「男らしさ」を発揮しようとする試みがことごとく失敗する。

クワンの家から脱出したジュバとマスが売店で食料を買い込む場面がある。空腹であることに加えてジュバが事情を何も説明してくれないことに腹を立てているマスは、売店に入ると手当たり次第に食べ物を買い物かごに入れていく。支払いを心配するジュバが商品を１つずつこっそり棚に返していくが、そのすきにマスは別の買い物かごにいっぱいの食料を入れてレジに並ぶ。手持ちの現金が少なくて支払えないかもしれないと心配するジュバに対し、マスは自分も現金を持っているし、足りなければ自分のカードで払ってもいいと言う。これに対してジュバは、夫たるもの妻に支払いをさせるわけにはいかないと見栄を張るが、マスは「男の人ってみんなそうなのね……」と笑って支払いを済ませ、夫が妻を養うものというジュバの思いは粉々に砕かれる。ただし上映時間の都合のためか、このやり取りは映画版ではカットされた。

マスはジュバに守られるだけの存在ではない。裏社会の「伝説の殺し屋」であるジュバが次々と襲ってくる刺客を倒して危機を脱するが、マスは車を運転して武闘の現場に乗りつけ、ときにはジュバの指示を無視して自分の判断で行動し、それによってジュバが救出される場面が何度もある。

ジュバの華人性と『ジュバ』の多民族性

『ジュバ』のもう１つの特徴として華人性の表象が挙げられる。ジュバは小説版では華人という設定だが、映画版では華人性が薄れている。ジュバの本名はアフマド・ジヤド・ビン・イスカンダル・フーである。この名前は、ジュバが民族的に華人である（少なくとも父親は華人である）ことと、イスラム教徒であること

6）ジュバとマスが歩くのはイポー市内のヤスミン・アフマド記念館があるスルタン・ユスフ通りのあたりで、２人が部屋を取るホテルは記念館と同じ敷地内にある。

を示している。

ジュバは幼い頃に両親を亡くして養父に育てられた。小説では、幼いジュバが自分と兄の顔が違うことを気にして、養母から「２人の顔が同じだったら区別がつかなくて私が困るでしょ」と優しく声をかけてもらう場面があり、華人であるジュバがマレー人に育てられたことをうかがわせる。しかし映画ではジュバはマレー人と華人の混血者と説明される。ジュバがマレー語で話すセリフは華人風のアクセントが感じられるが、マレー人が冗談で華人風のアクセントで話しているようなアクセントにも聞こえる。ジュバは華人のタクシー運転手と福建語を一言二言交わすだけで、映画版では華人性はほぼ失われている。

これと関連するように、ジュバやクワンはイスラム教徒であることが強調される。ジュバはマスが華人の屋台で買った鴨肉をハラルでない可能性があるからと言って捨てさせる。クワンもわざわざ礼拝することを強調する場面があり、『ジュバ』では華人であるかないかにかかわらず登場人物はイスラム教徒であることが強調されている。

登場人物で華人の役であるのは屋台の店主と薬局の店主で、どちらも演じているのは華人女性の俳優であるが、マレー人が華人を装うようなマレー語を話す。キット（トゥア）も華人の役であるが、演じている俳優はサバ州出身のブミプトラと華人の混血者で、イギリスでの滞在経験が長いこともあり、セリフはイギリス風アクセントの英語を話す。

車が崖から落ちて大破したジュバとマスが通りかかったトラックに乗せてもらってイポーに着いたとき、小説ではジュバが運転手に謝礼を渡そうとすると、マレー人どうしで助け合うのは当たり前だから礼はいらないと言って謝礼を断られる。映画では運転手はマレー人ではなくインド人（シク教徒）である。謝礼についてのセリフはないが、ジュバが運転手に何かを渡そうとして運転手がそれを遮る様子が見える。

『ジュバ』の作品世界はマレーシア社会の実情を反映した多民族的な構成になっているものの、映画版では多民族性は薄められ、登場人物の多くがマレー人イスラム教徒であるかのような印象を与える。

小説版では、刺客たちは華語を話すので華人であるように描かれている。小説版の作品世界では、裏社会は華人の世界、表の社会はマレー人イスラム教徒の世界と明確に分かれており、ジュバは華人の世界からマレー人イスラム教徒の世界に移ってきた存在と理解される。次項ではこのことの意味を考えてみたい。

『ジュバ』が描いた新たな国民的物語の特徴③

反逆者ジュバと讃えられるトゥアという定型

『ジュバ』で特筆されるのは主人公ジュバの扱われ方である。冒頭で書いたことの繰り返しになるが、ジュバという名前は、マラッカ王国のスルタンの臣下の１人であるハン・ジュバを想起させる。マラッカ王国時代のスルタンの臣下と言えばハン・トゥアが知られており、国民的英雄としてマレーシア国民なら知らない人がいないほどである。ハン・ジュバはハン・トゥアの幼い頃からの仲間であるとともに最大のライバルでもある。

伝承では、武術に長けたハン・トゥアたちはマラッカのスルタンに引き立てられたが、ハン・トゥアがスルタンの寵愛を得たことを妬んだ宮廷内の陰謀によってハン・トゥアは濡れ衣を着せられ、スルタンは事実を調べることなくハン・トゥアの死刑を命じた。これを知ったハン・ジュバは義憤からスルタンに反逆し、王宮を占拠した。ハン・トゥアは実際には死刑に処されずに匿われており、そのことを知ったスルタンはハン・トゥアを赦し、ハン・ジュバの討伐を命じる。スルタンへの忠誠を重んじるハン・トゥアはハン・ジュバを倒す。

ハン・ジュバがスルタンに反逆したのは義憤のためであり、ハン・トゥアがハン・ジュバを倒したのはスルタンへの忠誠のためである。王国時代の伝承が植民地時代に再発見されて以来、公的な物語では忠臣のハン・トゥアが讃えられ、ハン・ジュバは反逆者とされてきた。ただし、文学や演劇や映画では、ハン・ジュバこそ正義・公正を求めた真の英雄であるとする作品も多く作られてきた。ハン・トゥアとハン・ジュバの物語は、バリエーションをもって語り直され続けてきたことを通じて、正義と忠誠をどう捉えるべきかについての考え方をマレーシア社会が共有するメディアの役割を担ってきた。

書き換えられた「義」をめぐる物語

ただし、ハン・トゥアとハン・ジュバの物語には元となる伝承が存在する以上、その筋を大きく変更して語り直すことはできない。いずれの語り直しにおいても、ハン・ジュバがスルタンに反逆し、スルタンの命を受けたハン・トゥアがハン・ジュバを倒すという筋は維持されてきた。これに対して『ジュバ』は、小説版も映画版も、ジュバが主人公になっているだけでなく、ジュバがトゥアを倒す点で画期的である。

ハン・トゥアとハン・ジュバの物語では、ハン・ジュバがスルタンに反逆し、それをハン・トゥアが倒すことで秩序が回復される。しかし小説版と映画版の『ジュバ』では、ジュバは裏社会から足を洗っており、裏社会から見れば「裏切り者」つまり「反逆者」である。それを裏社会のリーダーを継いだトゥアが倒そうとする[7)]。したがって、裏社会の側から見れば、『ジュバ』はハン・トゥアとハン・ジュバの物語に沿っており、最後にトゥアがジュバを倒すことで物語が完結するものと想定される。

しかし『ジュバ』は、ジュバがトゥアを倒すことでハン・トゥアとハン・ジュバの物語を書き換えている。ジュバが裏社会から足を洗ったのは「裏切り」ではなく、悔い改めて犯罪集団から足抜けしたのは正しい行いだったと理解される。映画版では文脈が十分に説明されないため、ジュバの「ジュバは反逆したことはない」と言うセリフはやや唐突との印象を受けるが、何としてもこのセリフをジュバに言わせたいという制作スタッフの思いが感じられる。

ジュバに倒されたトゥアが裏社会の一員であることと合わせて考えると、『ジュバ』は、悪事に手を染めていたジュバが悔い改めて犯罪集団から足抜けし、犯罪集団に遣わされたトゥアがジュバを倒そうとするがジュバに返り討ちにあう物語であるとまとめることができる。これをハン・トゥアとハン・ジュバの物語に重ねてみるならば、マラッカ王国のスルタンは犯罪者集団のリーダーで、スルタンに仕えて悪事に加担していたハン・ジュバが悔い改めてスルタンから離れ、それを裏切りと見たハン・トゥアがハン・ジュバを倒そうとする物語となる。トゥアが倒されることは、トゥアには義がなく、したがってスルタンにも義がないことを意味している。ジュバがトゥアを倒すだけでなく、トゥアが仕えるものを裏社会と同列のものと扱うことになっていることに『ジュバ』の大きな特徴がある。

7）映画版では小説版の裏社会に関するエピソードの多くがカットされ、ジュバとトゥアの関係は十分に描かれていないため、以下では必要に応じて小説版で補っている。

現実社会の秩序への鋭い批判

小説版『ジュバ』が刊行された2017年は、翌年の総選挙で建国以来初の政権交代が起こってナジブ首相が退陣する直前の時期に当たる。政権の正義・公正に対する不信感の高まりが最高潮に達し、ハン・トゥアが象徴する指導者への忠誠による秩序維持に多くの人びとが疑問を抱き、それに反逆して秩序をいったん壊すハン・ジュバの登場を待望する声が高まっていた。

『ジュバ』では、トゥアは不正義の秩序の守り手であり、それを倒すジュバが正義である。ジュバを正義に、トゥアを不正義にするための仕掛けが、ジュバとトゥアが属する場を裏社会にすることと、ジュバとトゥアに華人の出自を与えることだった。「トゥア＝正義、ジュバ＝反逆」というイメージを逆手にとり、二次創作ゆえの反転の技法により、ジュバをアウトローの陰りを残したまま正義のヒーローにした。このことは小説を離れて、ハン・トゥアのイメージを纏う政党が担う現実世界の秩序に対しても鋭い批判を放ったといえる。

映画版では、おそらく上映時間の都合のため、ジュバがトゥアを倒すという本筋は残したまま、小説版に書かれていたそれ以外のエピソードは大幅に削ぎ落された。ジュバがアウトローの出自を持つ英雄であることを描くため、裏社会の出身を隠してマレー人のお嬢様に尽くすジュバのコミカルな人物像が強調されるとともに、イスラム教徒としての敬虔さが強調されることで、華人として生まれたがマレー人社会で育ったジュバの陰りは薄れた。その上で、裏社会の組織を守ろうとするトゥアを打倒した。たとえ１人になろうとも義のために反逆するというハン・ジュバらしさは失われているとも言えるが、『ジュバ』はトゥアを倒す姿を映像で見せた最初のジュバの物語として記憶されることだろう。

参考文献

E-Man Sufi. 2013. *Bukan Kerana Aku Tak Cinta*. Selangor: Karyaseni.

E-Man Sufi. 2017. *Jebat*. Selangor: Karyaseni.

山本博之 2019a「正義と忠誠の十字路――2018年のマレーシアにおける政権交代と映画」山本博之編著『正義と忠誠――混成アジア映画研究2018』京都大学東南アジア地域研究研究所、pp.8-15。

山本博之 2019b『マレーシア映画の母 ヤスミン・アフマドの世界――人とその作品、継承者たち』英明企画編集。